
Post nubila Phoebus

春桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Post nubila Phoebeus

【Nコード】

N9827U

【作者名】

春桜

【あらすじ】

携帯もパソコンも普及していない時代、人々は音楽に酔いしれる。ミュージシャンを目指す少女と、画家を目指す少年。それぞれの思いが交差するとき二人の夢は果たして叶うのか？夢に生きる少年少女を描いた青春ラブストーリーです。

春木 耀

私は昔から音楽が好きだった。

誰でも、赤ちゃんの時から音楽を聴いていると思う。無意識に喜んだり、悲しんだりした筈だ。

私はテレビから伝わるメロディーに何時もニコニコ微笑んでいたと両親は言う。

音楽って、色々なジャンルがあると思う。

大昔はクラシックから始まって、ポップス、ジャズ、ロック、演歌……。

私は全て好きだったけど歌うのは何時もポップスだ。それは日本字がJ・POPというジャンルを作ってそれが主流だからだ。

幼い頃は漠然とした音楽が好きだったが、幼稚園に入った頃ぐらいには全体的に演歌を聞き出した。

当時活躍していた北島三郎だったり、五木ひろしだったり。演歌はとにかく好きだったらしい。

今じゃ、てんで聞かない。あの時の情熱はどこへやら。

とにかく、音楽が好きで歌う事が好きだった。

CMで流れた曲はすぐに口ずさんだ。誰が歌ってるとか関係ない。気に入った曲はすぐにコピーだ。

家で遊ぶときは、歌を歌うか、父親が持っていたカセットテープを勝手に取り出して聞いていた。男の声だったり、女の声だったり……気に入らないものもあったが楽しんだ。

「ほんまに、^{ひかり}耀は音楽が好きやなあ。耀、なんか楽器とかするかー？」

と半ば冗談で言った父の言葉はまんまと私の子供心を掴んだ。

結構流行りつつあったピアノを習う事になった。私は喜んで叩いた。けれども私はピアノが嫌いだった。楽譜は読めないし、何処がドともわからない。

習って弾いても弾いても上達しなかった。悔しかったが、諦めた。けれども音楽は好きなので、自分の手元から音楽が鳴るのは楽しい嬉しかった覚えがある。

いつまでたっても幼稚なものしか弾かせて貰えなかったけど幼稚園を卒業するまでピアノは続けた。

幼稚園では遊びが中心だけど、音楽の授業があった。

先生がピアノを弾いて歌をみんなで歌う。私はとびきりデカい声で歌った。森のくまさんだったかな。

そうしたら、「音痴だ！」と言って男の子がからかってきた。

私は言い返せるような子じゃなかったから、何も言わず泣きじゃくった。

私には歌が駄目なのだろうか。そう思いつつ友達と離れて皆が外で遊んでいる中、部屋の隅っこで即興で作った歌を歌っていた。

「綺麗な声だね」

そう言ってくれた声があった。隅っこで何時も絵を描いていた男の子だ。

地味で大人しい子で、目立った事は嫌いのようなだった。

私はその子に近付いて、勇気を振り絞って話し掛けた。

「わたしの歌、へんじゃない？」

「へんじゃないよ。綺麗な歌だよ」

そう男の子は言ってくれた。死ぬほど嬉しくて涙が出た。

これが彼、萩原龍希はぎわらりゅうきとの出会いだった。

それから、私は龍希と一緒にいる事が多くなった。女の子との付き合いは苦手だったし、大人しい女の子も少なかったから私は一番いて楽な龍希と何時も遊んでいた。

遊ぶと言っても、私は部屋にある楽器を演奏したり、歌を歌うだけで、龍希はそれを微笑んで聞いてくれたりやっぱり絵を描いたりしていた。

龍希の絵は風景が多かった。アニメのキャラクターを描いたりもしてたけど風景の方が龍希は好きみたいだった。

会話らしい会話は幼稚園児の癖に少なかったかもしれない。独り言を偶に龍希が受け止めて返してくれたりしたぐらいだ。

私はそれで満足していた。だって龍希は何時も私を褒めてくれたから。

ある時。もう幼稚園が終わる頃の事だった。

「耀ちゃんは、何処の小学校に行くの？」

「えーと…アイカイ？」

「じゃあ違うね。もう会えなくなるかな」

と龍希は平然と言う。これでお別れ？私は信じられなくて最後まで信じなかった。

卒園式が来て、龍希の両親が言った。

「小学校が違うけど、また龍希と遊んだってなあ。耀ちゃん」

龍希は最後まで私に拘らなかった。また会おうね。遊ぼうね。そんな言葉もなしだ。

私の両親も龍希の両親と同じような事を言っただけで別れた。

龍希は、もう私と居たくないのではないか。そう子供ながらに思うと涙が止まらなかった。

小学校に入ると、色々な子供たちがいた。人見知りが激しい私は入学式の時には誰とも話せなかった。

両親がいなくなると心細くなつて、家から出たくなって泣き言を母に言つて学校を休むと要求した。

当然、母が許す筈も無く学校に仕方なく学校に行つた。

教室にいるのが苦痛だつた。雑音は音だけど、音楽じゃない。それにこんなところで歌を歌つたらまた馬鹿にされる。それが怖かつた。学校に入つても、友達とは中々出来なかつた。色々な行事があつただけで楽しめなかつた。

勉強も苦手だつたから学校に行く目的は……やっぱり音楽の授業。

先生は音楽の授業だけは私の積極性を褒めてくれた。何時もは一人で大人しくしているのに歌を歌うときは我を忘れて歌うからだろう。

小学校で私は転機を迎えた。同級生の女の子が歌手デビューを果たしたからだ。

彼女の名は藍田真奈美。あいだまなみ 小学三年生と言う異例の幼さだつたが歌が

うまくてスカウトされそのままデビュー。実際、彼女はオーディションなんかを受けてたし、それなりの努力はしていたんだ。

彼女は愛くるしい顔で子役デビューも果たす。でもドラマのワンシーンだし放送される地域も違つていたから世間で話題にはならなかつた。

それでも学校での彼女の扱いは違う。彼女に嫉妬する者もいれば、感心する者もいる。

私は嫉妬というより感心だつたかな。クラスは違つし、話し掛けられなかつたけど。

それでも彼女のおかげで私はオーディションを受ける事にした。両親に言つと、そりゃあ驚いて中々取り合つてくれなかつた。

「おまえ、何でそんななんうけねん。アホちゃうか」
父親にはそう言われた。それで母親と喧嘩。うちの家庭は崩れ始める。

小学校高学年で父と母が離婚。理由は父が作つた借金だつた。それ

と浮気もだ。

当然、オーディションなんかに受けるお金が無くなった私は諦めるしかなかった。

母に引き取られ、苦しい中二人でアパートで暮らした。不満は無かったが、ラジカセが家に無くて音楽が聞けなくなった。

テレビで聞くしかない。やっとできた友達の家に行って当時流行ってたバンドの曲を聞かせて貰ったけど自分の家でやっぱり一日中聞いていることがあった。

小学校六年生では作曲を始めた。と言っても歌詞を書くだけ。楽譜も読めないから曲を作るなんて皆無だった。

将来の夢は何時も、歌手。それを言えるのが私のたった一つの取り柄だった。

春木 耀（後書き）

80年代から90年代のお話ですが今とこっちゃんになる可能性が
ありますのでご了承ください。

萩原 龍希

小学校を卒業して、中学校に入った。小学校は私にとって平穏な時代で中学校は結構過酷だったと思う。

中学校は小学校の倍のクラス数になった。人が多い処は苦手なので、中学校は本当に嫌だった。

入学式の事はまだ覚えてる。やたらと暴れていた男の子がいて最悪な気分になったのだ。

女の子も結構派手だったし、元々この地区は治安が悪いのだ。

そんな最悪な中学でも、たった一ついい事があった。
新しいクラスになって、自己紹介をする事になった。

「皆、よろしくなあー!! あははは」

と笑うクラスのお調子者、神樹君。彼はきっと人気者になるだろうな。

などと皆の自己紹介をばーっと聞きながら私は考えていた。

私の番になって、私は緊張しながらも前に出て大きな声で名前を言
ったのを憶えている。死ぬほど恥ずかしかったことも。

まあ。私の事など気にしないでいいんだ。問題は彼だ。

「萩原龍希です。宜しく願います」

記憶が蘇った。幼稚園の頃、何時も遊んでいたあの男の子。
絵をずっと隅っこで書いていた…。

「龍希」

思わず呟いたら龍希はこちらを見つめたように思えた。あの頃の龍

希とは似ても似つかない。ほっそりして、目は切れ長。女の子のよ
うに白い肌で男らしさは無い。
でもマジマジ見つめる事が出来て考えたら、彼はモテないはずがな
い男前だった。

私は数か月がたっても彼に話し掛けれずにいた。女の友達が出来た
が男とは中々話せない。

思春期なのか思うように男は動くものじゃない。昔はもつと自重し
てたように思うけど。

龍希はクラスで孤立していた。まだ始まったばかりだけど、龍希と
他の子ではレベルが違いすぎる。

此間の中間テストでは龍希はダントツの一位だった。

運動もできたし、やっぱり絵を描いている様がよく見れた。流石に
空気を読んで描いていない時もあつたけどほとんどの休み時間は絵
を描いているようだ。

その絵はアニメの絵だったり、風景の絵だった。覗き見している時
点で自分はどうかしてる。

しかし、何故か龍希は女の子から人気は無かった。

「えー？ 耀、あんなのがタイプなん？」

クラスでよく話す友達に聞かれた。今では顔も覚えてないけど。

「え？ いや私は別に…」

「萩原はあかんで。アイツ、あんな大人しいしてるけど不良の間で
も一目置かれてるぐらいらしいで。それになんかこわいしなあ」

言っている意味が理解出来なかった。怖い？ 不良に一目置かれてる
？ だからなんだ。

龍希は喧嘩するような人じゃ…そう言いたかったけれど。

私は龍希の事を何も知らない。

友達の言った通り、龍希の周りにはいわゆるヤンキーが取り巻いていた。何故彼に惹かれているのかわからない。ヤンキーとは縁がない為、奴等の気持ちは女子には理解不能だ。
一学期が終わる頃、私はまだ一度も龍希と話していない事に気付いた。

話し掛ける勇氣は私にはない。窓側の席に座る龍希をただ見つめていた。

目が合う事も一度も無い。それに私はショックを受けていた。変な考えだけど。

私は虐められる対象ではなかったけど、よく不良にからまれた。

「おい。春木イ。お前、俺達の事よう見てるなあ。なんか文句あるんか？」

などと番長格の音鐘君が大声で話し掛けてくる。クラスはシーンを静まりかえってる。

このころの不良は今と違って先生が徹底的にしごいていたから女子に下手なマネはしないだろうが、言いがかりはよくある。

私は机の前で硬直していた。友達も誰も助けてはくれない。

音鐘君が近付いて私の顔を覗き込んできた。

「やめろ。音鐘。」

あの自己紹介以来、聞いた事が無いだろう彼の声。まだ変声期は迎えていないけれど…幼稚園の時とは違う彼の男らしい声。

（何が起こっているの…？）

ずっと見つめているだけだった龍希が、今目の前にいる。私は状況がよく読み込めなかった。

気が付くと音鐘君が持ち上げられていた。あの大きな音鐘君が。

大きくも無い龍希に。

「いつ！？りゅ、龍希？」

「話し掛けんなよ。何もしてねえのにつっかかるな」

そう言い終わった瞬間、龍希は私の腕を思い切り引っ張ってきた。男子の力だった。

何処まで連れて行くのかわからなかったが、大人しく体を預けた。昼休みの終わりのチャイムは鳴り、授業が始まってしまった。

お互い何も言わず、抵抗もせず…最終的にやってきたのは屋上だった。

その日は暑くて日にあたれば焼けてしまいそうだったからなんとか影に寄った。

「…驚いた？」

横目で龍希が私を見ている。いたずらに微笑む龍希は出会った頃と変わらない。

「何が？」

「耀に音鐘がつつかかった事。アイツ、君が好きなんだよ」

「えっ？」

私はきょとんとしてしまった。すると不思議と恥ずかしくなくなつて口が開けた。

「は、萩原君に迷惑かけたんじゃない？」

「そんな事ないよ。…なあ。耀、俺と今まで話してくれなかったのは何で？」

「なんでって…。」

嘘はつくべきではないと思った。だから正直に真っ直ぐ彼を見た。

「恥ずかしかったし…私の事、覚えていてくれないと思った」

「忘れる訳ないよ。耀は俺の一番だから」

切れ長の目で見つめられるとドキドキして顔が赤くなった。

「俺はずっと不安だったよ。耀が俺の事忘れてるって思ってた」

「そんなん…忘れへんよ…」

「本当？」

顔が接近して汗がだらだら流れた。こんな綺麗な顔を近づけられたら誰だって焦る。

頷くと、満足したように龍希は元の位置に戻った。

「よかった。俺心配してたんだよ。耀の事。小学校違ったから耀がずっと寂しい思いしていると思って」

寂しい思い…確かにしていた。友達もろくにいなかったし両親も離別した。兄妹もいないし…。

「中学で同じクラスになって嬉しかったんだけど、俺は精一杯だったんだよ。君を護るので」

「護る？」

「ああいう、馬鹿な奴等からだよ。音鐘みたいな」

言っている意味が理解できません。そう言いたいけれど嬉しさの方が勝った。私を想って言ってくれている気がしたから。

「ヤンキーは何をしでかわからないから…君に言うつもりはなかったんだけど君と話したかったし、音鐘が君に近付くのも嫌だったから」

「…龍希。なんでそんな事を？」

「だから、それは君が俺の一番だから。俺さ。しゃべり方変じゃない？」

変？そう言われれば…。

「標準語やね」

「そう。大阪に住んでるのに可笑しいよね。こんなんだから友達もできなかった。でもさ。俺には耀がいたよ。耀は俺に話し掛けてくれた女の子。俺に笑ってくれた女の子…」

そう紡ぐと私の手を握った。熱い手だったけど細い。

「歌はまだ歌ってる？」

「うん」

「俺も絵を描いてるよ。ねえ、耀。俺の絵を見ただろ？」

「うん。すごい上手いからビックリした」

「まだまだだよ。俺なんか。でもすごいね。お互い、幼稚園の頃から何一つ変わってない」

それは夢だけだ。他は変わった。

「これからどうする？」

「どうするって…あ。授業！！」

私が走ろうとすると、龍希は手を引っ張って離さない。

「いいから。これからの事話そう」

「これからの事？」

「俺は、クラスで孤立してる。けど君はそうじゃない。今日、あんなふうになった事で周りはひいてたよ。だから君ももしかしたら何かあるかもしれない。音鐘にはちゃんとするけど。先輩までは俺もさすがに手が出せないから」

「心配しすぎだって。何もしなきゃ何もしてこないって」

龍希はそれでも不満そうだ。何に対して何だろう。よくわからないけど私の意見を話すと。

「私は…龍希としゃべりたかったけどしゃべられへんかった。だから今のままでいい。なんか言ってる意味わからんけど」

龍希は不意を突かれたような顔をする。

「それは…俺ともう話さないって事？」

「ぎこちなく頷くと龍希は思い切り溜息をついた。

「わかった。耀がそうしたいならそうでいいよ」

「そうしたいっていうか…。なんか変じゃない？龍希と私がしゃべってるのって」

「うーん。まあな。俺はクラスで浮いてる存在だし。表向きでは不良とつるんでるしな…耀は一つ約束して」

私は黙って聞いた。

「お互い、極力話さない様にするけどクラスメイトとして話すのはいいでしょう。どうしてももの時ね。それ以外は関わらない。来年まではね」

「来年まで？」

「中学卒業まではキツイよ。俺達が中二になったらもう少しお互いの事話そう」

龍希は私としゃべりたいような言いぐさだ。どうしてだろうか？特別な存在でもないのに。クラスでも目立つ方じゃない。なのに龍希は私ばかり気にしてるような言い方。

この男は謎だらけだ。幼稚園の時からそれは変わっていないかもしれない。

そうして私達の鉄の約束は結ばれた。こんな事する意味はないと思うかもしれないけれどこれがお互いの線引きになる事になる。

というよりお互いに普通の友情関係では最初からなかったという事だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9827u/>

Post nubila Phoebus

2011年10月7日07時40分発行